續松葉集第三（内題）

春部

立春　春そ来る豊芦原のあしつゝのひとへ計もさはりなき世に　一五九五
海神のいはふ玉藻にすむ虫の我からけふの春そ長閑き　一五九六
雪間よりみれはかつ〳〵青みそふ垣根の草も春はきにけり　一五九七
唐衣はるは来にけり敷嶋のやまと詞の花のみやこに　一五九八

五十の年に讀侍る

みつわくむ老もへぬへし筒井つのいつゝの十の春はむかへつ　一五九九
今朝はまた曇らぬ空もをのつから心より先春やたつ覧　一六〇〇
立春氷　池水の氷も解る朝附日さしくむからに春そ長閑き　一六〇一
氷ゐし岩間の浪のうちつけに音も長閑き春はきにけり　一六〇二
年内立春　時しらぬ山とはいはし春たては年の内にも霞むふしのね[一三オ]　一六〇三
降雨も霞にこめて年の内に春は空より立初めけり　一六〇四
年の内の日数なからす梓弓をして春立空そ長閑き　一六〇五
初春　明ほのや難波の浦も霞らむとこめつら敷春の初空　一六〇六
初春雨　数ならぬ垣根の草も萌出るあまねき春の雨をむかへて　一六〇七
初春待花　春の来て唯世の人のこと種は今幾日ありて花や咲へき　一六〇八

早春霞　山の端の雲に霞の立そひて曙とをき春の初そら　一六〇九

佐保姫の袖吹かへすと計に霞も匂ふ春の初かせ　一六一〇

子日　子日してひかはや千世の種しあれは岩にも松は老のためしに　一六一一

谷鶯　出ぬへき都の春や思ふらん聲ならはせる谷のうくひす　一六一二

軒鶯　鶯の聲のあやをり乱るやふるき軒端の忍ふもちすり　一六一三

竹鶯　呉竹の緑は春をわかね共それとしらるゝ鶯のこゑ　一六一四

竹間鶯　鳴捨ていつくに移る鶯の聲の色をは竹に殘して[一三ウ]　一六一五

名所鶯　花さかん春になりぬと鶯の聲先匂ふみよし野の山　一六一六

若菜　雪間より生る若菜の淺緑はつかに春の色や見すらん　一六一七

餘寒風　雪を深みつむにたまらぬ若な哉かたみに汲る水にはあらねと　一六一八

殘雪　野邊に出て見れはこそあれ雪間をも人はしらしと若なをそ摘　一六一九

谷殘雪　霞こそ春のしるしと見し物をそをたに拂ふ風の寒けさ　一六二〇

春氷　白雲は吹つくしたる春風につれなく殘る嶺の雪哉　一六二一

朝霞　春風は深谷に殘る白雪の花のあたりやよきて吹らむ　一六二二

霞隔遠樹　かた分て池の氷や解ぬらんさけるさかさる波の初花　一六二三

霞隔行船　春霞たな引空に山の端を出ていさよふ朝つくひかな　一六二四

夜梅　春されは木ゝの梢のめもはるに山は霞にわかれさりけり　一六二五

友船の行ゑしられぬ春霞八重の塩ちや漕まとふらん　一六二六

軒ちかき梅や咲らん手枕のすき間の風にかはる梅か香[一三オ]　一六二七

梅風

空焼の煙もたてぬ独ねに心ときめく夜はの梅か香　一六二八
花守は心なけれと梅かゝを往来の袖に送る春かせ　一六二九
匂ひ来る君かあたりの梅の花こてふに似たる春の夕風　一六三〇
ねやの内に梅こそ匂へ花にさへ風の嬉しき折も有哉　一六三一

檐梅

朝日さす軒のたるひも諸友に解るや梅の花の下紐　一六三二

梅薫袖

手折ぬと人や思はん春の野を分行袖に移る梅かゝ　一六三三

落梅浮水

散かゝる水も結はん梅の花あかぬ匂ひの手にやとまると　一六三四
あせたる池の邊に梅の咲たるを見て
水枯て汀の梅の色かにもそまぬや池の心なるらん　一六三五

雨中春草

年明て猶あは雪のふる草も緑にかへる春雨のころ　一六三六
いかなれはなへてうるほふ春雨にむら〳〵みゆる野への若草　一六三七

柳露

春来れは緑の色に置露のめくみにゆらく玉の小柳」三ウ　一六三八

柳靡風

音もなく霞のうちに吹風はなひく柳のすかたにそしる　一六三九

柳隨風

あさ緑なひく柳の陰見れは春の色にそ風も吹ける　一六四〇

岸柳

よせ帰る浪にねさしも安からて風に隨ふ岸の青柳　一六四一

水邊柳

風になひく柳の枝に櫻花咲かとそ見る池のしら波　一六四二

帰鴈

詠むれは雲ゐのよそに立帰り哀れとそ思ふ春の鴈金　一六四三
秋の月に数さへ見えて来る鴈の帰るにつらき朝霞哉　一六四四
帰るにはしかしと鳥の鳴聲を聞つたへてや春の鴈金　一六四五

帰鴈遙　薄墨にかさねし山とみゆる哉つらなり帰る遠のかり金　一六四六

春月　天つ風吹にけらしなさやかにも霞の間よりみゆる月影　一六四七

吹風にたなひく雲は消れ共霞むはおなし春の夜の月　一六四八

川春月　ちらてもや花の鏡の曇るらん朧月夜の移る川水　一六四九

桃　咲桃の花物いはゝ仙人の住家をそこと尋しらまし」四オ　一六五〇

をのゝえも朽し所か三千年になるてふ桃の花の林は　一六五一

けふ人の心をよする敷嶋のみちよへて咲桃の花かな　一六五二

三月三日　川水にけふ散花の紅の匂ふか上に浮ふさかつき　一六五三

曲水宴　身の後の金も何に川水の浪間に浮ふけふの盃　一六五四

春曙　雲の上に袖引かさるたをやめのおなし匂ひに霞む曙　一六五五

野雲雀　春の野に雲ゐをさして鳴雲雀あかるは落る初め成けり　一六五六

遊糸　賤はたに乱もやらす春風ののとけき空に遊ふいとゆふ　一六五七

蜘蛛のすかくとみれは春の日の光に遊ふ軒のいとゆふ　一六五八

待花　待ほとはうたてつれなし櫻花あたなりけりと誰思ひけん　一六五九

さかぬ間は櫻か枝に置露の玉ちる計物おもふかな　一六六〇

春来れは心ひとつにまたれけり我為のみの花にはあらねと　一六六一

山里のつかひより先嬉しきは花待ころの雨の音つれ」四ウ　一六六二

さかぬ間の櫻や松に成ぬらん千年の日数ふる心ちする　一六六三

閏月待花　くはゝれる春の籬の風をあらみ花の盛やまとを成らん　一六六四

花面影　待侘る心の奥の山見れは咲ぬ日もなき花の面影　一六六五

尋花　またさかぬ山路尋ていたつらに行てはきぬる花の陰哉　一六六六

初花　都人色めきたてる衣手のうちめつら敷春の初花　一六六七

花送連日　待ほとは心つからに永日の思へは早き春のはつ花　一六六八

初櫻　ちれは咲こゝらの花の木の本にさそな旅ねの数そ積れる　一六六九

花香　かそへ来し春の日数の思ふより外なる花の初櫻哉　一六七〇

翫花　なつかしきかをいかにせん咲花の色には通ふ色もあらまし　一六七一

世とゝもにちらぬ櫻の陰も哉あかぬ心の果しをも見む　一六七二

見花　色に香にそむ心哉咲花を春のさかとは思ひなせ共　一六七三

待うさも散別をも忘られて花みる時そ何心なき一五オ　一六七四

雨中に糸櫻を見侍りて

花の枝はたゝ蜘蛛の糸櫻人やとひこん雨の中にも　一六七五

いとはやも雨に咲ぬるいと櫻柳に殘る雪かとそ見る　一六七六

夕花　見るまゝに花の木陰もくれは鳥あやにくに猶あかぬ色哉　一六七七

山花盛　花さかり山はさなから白雲の心にかゝる風たにもなし　一六七八

夜花　夜もすから思ふ心や知ぬらん花も匂ひを送る山風　一六七九

山花　吹風のめに見ぬ花も匂ひくる霞む山路の春の曙　一六八〇

暮山花　籬ならぬ山路の春も夕暮の花にはいかてとまらさるへき　一六八一

花似雲　山高み夕の雨に咲つゝく花は朝の雲と見るまて　一六八二

花色　今はとて帰らん物をあやにくに暮れはまさる花の色哉　一六八三
花時心不静　あふ事の稀なる春と思はすは心長閑に花は見てまし　一六八四
花樹久芳　都邊は軒端を高み吹風に任せぬ花そ匂ひ久しき」五ウ　一六八五
花契千年　世とゝもにあかぬ心もわりなきに花に千年の外は契らし　一六八六

金瀧寺の花を見侍りて

花埋路　末の代に見よとや植し古の人の心の花を殘して　一六八七
花雪　みよし野や又こと方を分て見む花の埋まぬ道も有やと　一六八八
花落半　よそにたか簾かゝけて詠むらん分入嶺の花のしら雪　一六八九
落花如雪　咲花も半ちり行木の本の雪吹かへせ春のやま風　一六九〇
殘花何方　花と見ぬ花とて花におとらめや庭は降しく雪の曙　一六九一
遊山催興　今は又霞そ頼む三輪の山人にしられぬ花や殘ると　一六九二
蛙鳴苗代　打むれて山邊に遊ふ春の日は月さへ出る花のこすゑに　一六九三
早蕨　流行苗代水のすちことに聲もわかれて蛙なくなり　一六九四
菫菜　里遠き片山陰はやかね共をのれともゆる春の早蕨　一六九五
杜若　むらさきの一もとならてみゆる哉野へはみなから菫咲ころ」六オ　一六九六
躑躅　紫に咲ぬる池のかきつはた散にし藤のゆかり成らし　一六九七
欵冬傍岸　山吹の咲ましりたる岩つゝしいはぬ色より猶まさりけり　一六九八
瀧邊紫藤　芳野川はや瀬の浪はつらし共いはてかたよる岸の山吹　一六九九
　　咲藤の枝をましへて紫のあはをに見ゆる瀧の白糸　一七〇〇

水邊松藤　川岸の松にかゝれる藤の花ちるこそ波の帰る成けれ　一七〇一

三月盡　行春よ夢とな暮そ枕とて草も結はすあかす此夜を　一七〇二

（以下六行分余白）

夏　部

更衣　花染をかふるそおしきこん春もまとをにおれる麻の衣手　一七〇三

花染の衣はかへつ移りかよそふたに殘せ春の形みに　一七〇四

貴賤更衣　賤きもよきも心の花染をたかならはしの衣かへそも　一七〇五

百首の歌讀ける中に

更衣　けふといへはぬきこそかふれ夏衣心の花の散も果ぬに　一七〇六

新樹　散つくす花の梢の深緑おしみし春の色を殘して　一七〇七

はかなくも春の花をそおしみける散すは木〻も緑ならしを　一七〇八

深山新樹　花の比分し深山の枝折さへそれ共見えす茂りぬる哉　一七〇九

夏の歌の中に

花紅葉に露のはへなき折も有をあかて緑の夏の梢は　一七一〇

色かへぬ杉のしるしも夏山やなへて梢の深き緑に　一七一一

卯花　月雪の色にはさけと卯花の賤か垣根はとふ人もなし　一七一二

樹陰卯花　茂りあひて日影ももらぬ庭の面に消あへぬ雪とみゆる卯花　一七一三

垣卯花　瀧つ瀬の流とや見む山里の垣根つゝきに咲る卯花　一七一四

里卯花　卯花のさける垣ねや白浪の常に見なれぬ里の中川　一七一五

卯花藏宅　卯花に賤か栖はしら波のよする渚にあまそ行かふ　一七一六
尋郭公　尋侘今はと帰る片山の思はぬ空に鳴ほとゝきす　一七一七
初郭公　時鳥それかあらぬとたとるまてはつかに名のる夜はの一聲　一七一八
杜郭公　とてもたゝ秋にはとはし時鳥生田の杜のいくへにもなけ　一七一九
遠郭公　我心雲ゐのよそに通ひてやほのかに聞し山郭公　一七二〇
月前時鳥　郭公雲のいつこに鳴ぬらん月は限なき夏の夜の空　一七二一
郭公稀　時鳥今はとき鳴時にさへまれなる聲の稀になり行　一七二二

ほとゝきすの歌の中に　└七ウ

時鳥卯月の空の忍ひ音も夜はの枕に百かへり啼　一七二三
降雨に袖は沾つゝ五月をや君か為にと早苗とるらん　一七二四
早苗　足たゆく通ふも遠き小山田にかれなて賤や早苗取らん　一七二五
さらぬたに隙行駒のとゝまらすいかにはやむるけふの射手人　一七二六
五月五日　葵草かけし卯月もくれは鳥あやめも後や戀しからまし　一七二七
菖蒲　かくれぬに生るあやめも時しあれはけふ九重の内に匂へる　一七二八
世〻かけて絶んものかは夏引の手引やけふのあやめ成らん　一七二九
あやめ草ふきぬる宿の五月雨にかほりて落る軒の玉水　一七三〇
ましる共あやめのかやは隠れぬのまこもの中を分てひかまし　一七三一
昔をも思ひ出れは芦垣の間ちかき庭に匂ふ立花　一七三二
かはらぬは昔や今に成ぬらん賤か軒はに匂ふ橘　一七三三

慮橘近砌
簷慮橘

樗　一七三四
夕日さす雲より雨のそゝくかとみれは樗の花の下露[ヘオ]

五月雨　一七三五
をとめ子か天降りなはいかゝせん雲間とちぬる五月雨の比

　一七三六
五月雨は降みふらすみ久方の空はしはしも晴る間そなき

江五月雨　一七三七
みさひ江に生る真菅のます〳〵も茂あひぬる五月雨の比

ある人の會に題をさくりて

夏草　一七三八
夏草の茂みか中に涼しさをたかひめゆりの花の白露

伊益老蘆屋へ来臨の時

夏草滋　一七三九
夏草の茂みを分てとふ人の跡を絶せぬ道になさはや

　一七四〇
秋とのみ思ひはいれし夏草のしけみか中の花の色〳〵

　一七四一
そことなく草の茂みを分行は夏こそ野への道はおほけれ

夕顔　一七四二
見ても実涼しかりけりこぬ秋の色に咲ぬる夕顔の花

瞿麦　一七四三
宿にかくみるそ嬉しきなてしこの生さき遠き花の盛を

鵜川欲曙　一七四四
あけぬへき空猶くらく成ぬらし鵜川のかゝり分てもゆるは[ヘウ]

夏川鳥　一七四五
夏川のゐせきにかゝる白波ををのか友とや鷺のよるらん

照射　一七四六
夏山や小鹿の角のみしか夜にねもせて誰かともしさすらん

　一七四七
夏虫のひとつ思ひによる〳〵のともしに鹿の身をや捨らん

夏月　一七四八
照月の影は曇りも夏の夜の霜のおきゐて明す比哉

　一七四九
村雨の雲のいつこに宿りてや更て出ぬる夏の夜の月

雨後夏月　一七五〇
夕立は猶涼しくもなかりけり雲間もりくる月を詠て

夏夜　うたゝねに片敷袖もひとへなる鶉衣のみしか夜の空　一七五一
夏床涎　うたゝねはまた宵なから明方の袂涼しき床のさむしろ　一七五二
螢　うすものにつゝむ光か緑なる庭の木陰にすたく螢は　一七五三
池螢　影移る池の心も夏むしのひとつ思ひにもえ渡るかな　一七五四
澤螢　ゑく摘し袖はかはかぬ沢水になとか螢のもえ渡るらん　一七五五
野螢　夜光る玉も何せん螢こそ遙けき野路のしるへ成けれ[九オ]　一七五六
窓前螢　夕暮の野邊の螢は百草の紐ときわたる花かとそ見る　一七五七
池上蓮　吹風にまたゝく窓のともし火ををのか友とや螢飛かふ　一七五八
夏雲　白妙に咲る蓮は池水の波の花とやよそにみゆらん　一七五九
夕立　いにしへの夢ならすともあつき日は雨とふらなん嶺の浮雲　一七六〇
村夕立　涼しさをまたは誰里に松はらの梢に晴る夕立の雲　一七六一
蚊遣火　涼しさをまねける玉のをのつからにきはふ村にふれる夕たち　一七六二
水鷄　あつき日の暮る間をさへたへ侘ぬしはしなたてそ蚊遣ひの影　一七六三
　老らくにあらぬ水鷄のたゝくをや誰門さしていとふ成らん　一七六四
　さやかなる月にならひて閨の戸のしらみて後もたゝく水鷄は　一七六五
水鷄夢驚　夏の夜の短き夢の覚るまをまたて水鷄や驚すらん　一七六六
蟬　夏山は明るともなく陰くらき梢に蟬のおりはへてなく　一七六七
瀧邊蟬　夏山の嶺より落る瀧つせといつれ高けん蟬の鳴聲[九ウ]　一七六八
扇　はかなくも涼しき陰を求めけるならす扇の風を忘れて　一七六九

閨中扇　ねやの中にならす扇はよもすから空にしられぬ月の影哉　一七七〇

泉　岩間よりもりくる水の涼しさは幾世の秋かたゝみ重ねし　一七七一

河納涼　瀧川のせゝの白糸絶〳〵に吹みたしぬる風そ涼しき　一七七二

船納涼　舟よする礒への波のよるかけて来ぬ秋風や松に吹らん　一七七三

樹下納涼　涼しさをそれとしらてや過すらんしはし立よる木〻の下庵　一七七四

松下納涼　水結ふ心ちこそすれ松陰や緑になるゝ袖の涼しさ　一七七五

夏野　すゝしさに今こん秋を松虫の聲をもたてよ野への夕暮　一七七六

花さかん程まつ野への萩原は色こそなけれ露の涼しさ　一七七七

夏の哥の中に

陰高き草葉を分てむすひよる野中の清水夏を忘れて　一七七八

なひきあひて秋待野への萩原や風に友なふ露の涼しさ└一〇オ　一七七九

夏の野は小篠かうれの霰より草にたまらぬ露のしら玉　一七八〇

野草近秋　亂れ飛螢ならても白露の野邊の草葉に秋は近しと　一七八一

夏祓　御祓する川瀬の波の白ゆふをとる手に秋の風通ふらし　一七八二

（以下九行分余白）└一〇ウ

秋部

早秋朝山　今朝よりは音もかはりて吹風の秋のしるしや三輪の杉村　一七八三

初秋風　天衣うらめつら敷吹風のをとめや返す初秋のそら　一七八四

新秋露　山の錦野へを色とる初めとやをけるも白き秋の朝露　一七八五

七夕

天の川今夜あけなは久敷も紅葉の橋の中や絶なん　一七八六
語る間もなみの逢瀬の天川わたす紅葉や夢の浮橋　一七八七
織女の逢夜そしるき世の人のかしつる糸やくものふるまひ　一七八八
たなはたにかさねはうとししかりとてきなれ衣はいともかしこき　一七八九

七夕雲

織女のたちぬふわさやつくすらん年に稀なる君かみけしを　一七九〇
七夕のこよひあふ夜の嬉しさや雲のは袖につゝみかぬらん　一七九一

二星適逢

うら嶋か箱ならすとも明なゆめ二つの星の逢夜と思へは　一七九二

乞巧奠

一筋に何をかいのる七夕にかしつる糸やよるのともしひ　一七九三
涼しさの後いかならん玉たれの隙もとめ入秋の初かせ　一七九四

秋風入簾

夕風もはらはぬ露のあさち原猶置そふる秋のむら雨　一七九五

淺茅露重

心のみ千ゝにつくしてそれとたに言の葉もなき秋の夕暮　一七九六

秋夕傷心

月草のうつし心もあらぬ迄野へにたはるゝ花のさかりは　一七九七

秋花

春はたゝ一木の上に見し物を秋の千種の花のいろ〳〵　一七九八

野草花

野へに咲千種の花のちゝの色にいつれかいつれ哀とはみぬ　一七九九

野草露

白露は染も分しを百草の種にまかせて花や咲らん　一八〇〇
打なひく尾花か袖につゝみてや風にこほれぬ露の白玉　一八〇一

荻風

等閑に花にいとひし風の音も軒はの荻に聞そ嬉しき　一八〇二

荻似人来

花薄ほに出てまねく袖よりも荻の聲こそ人たのめなれ　一八〇三

萩露

咲花の初もとゆひのこ紫たかしめ置る露の萩原　一八〇四

薄妨往反　むらさきの色に咲ぬる花よりも露そくたくる風の萩原[三ウ]　一八〇五

女郎花　花薄しるもしらぬもまねくには行も帰るもとまらぬはなし　一八〇六

秋鴈　女郎花匂ふか上の白露はたか手枕のなみたなるらむ　一八〇七

初鴈　行水に数かくとしも見ゆる哉雲ゐの鴈の移る川つら　一八〇八

聞鴈　何ことも思ひは捨しね覚さへきけは嬉しき初鴈の聲　一八〇九

月前鴈来　さ夜更てねさめさひ敷鴈金は常世の秋も思ひしれとや　一八一〇

山の端の雲より出る月影のはつかにわたる鴈の一つら　一八一一

定家卿四百年忌に

月前鹿　いとはれて妻や戀らん雲もなくなきたる月に男鹿鳴也　一八一三

夕虫　蚤いたく晞なり夕影に秋の哀れやわきてしるらん　一八一三

秋野虫　秋ふかく成行野への草村もかるれは枯るむしの聲哉　一八一四

野外虫　思ひ草ありとや野への蚤尾花か本に夜たゝ鳴らん　一八一五

籬虫　野を遠み草葉すくなきあたりには籬や虫の宿り成らん[三オ]　一八一六

月前虫　打むかふ月にやつるゝ我袖をつゝりさせとや虫の鳴らん　一八一七

八月十五夜　月の入山もなしてふ武蔵野を今夜都のうちになさはや　一八一八

こよひとて空そさやけき偽のなき世に出し月の影かも　一八一九

今夜そと天津み空もことに出ていはぬ計にすめる月哉　一八二〇

名にしおふ今夜の月としらねはや雲なき空を拂ふ秋風　一八二一

月の名は野にも山にもみちぬらしあこかれ出ぬ人しなけれは　一八二三

霧間よりもりくる月はおほろけの春にや今夜ちへまさるらん　一八二三
今夜とて月見る人の哀れてふ言の葉ことに露や置らん　一八二四
月見れは見ぬ世の人そ思はるゝ今夜は袖のかくはぬれしと　一八二五

八月十五夜西洞院に庵りを結ひて

今夜てる月を友とし思はすはまはゆかるへき草の庵哉　一八二六

おなし十六日の夜雨降けるに久しくあは[三ウ]

さりける三之といへる友の来侍るに

おもはすよ待ぬる月は曇る夜の雨にふりにし友の来んとは　一八二七
きのふにはかはらぬ影もいさよひの月の桂や一葉ちるらん　一八二八
待ほとも更行庭のしら露に草のはつかの月そ見えける　一八二九
はらへ共月の光はけぬか上に又も降しく庭のしら雪　一八三〇
岩波の音はしつゝも芳野川はやくそ氷る秋の月影　一八三一
さやけさの更にもそはし夜半の月もれ出る雲の絶間ならすは　一八三二
身におはぬ秋の野守の住る哉萩の錦を月にしきつゝ　一八三三
大空の月の光はさやかにてひとり時雨る嶺の松かせ　一八三四
秋といへはあかしもすまの蜑人もをのかさま〳〵月やみるらん　一八三五
秋の夜の長してふ名はつく〳〵と月待よひや初なりけん　一八三六
むかへ尾に出ぬる月は遅く共椎のこやてのしゐて待見ん[三オ]　一八三七
我のみと又何方におもはまし更て詠むる秋の夜の月　一八三八

いさよひの月
はつかの月
月映雪
川月似水
雲間月
月前草
月前松風
海邊秋月
待月
深夜月

山　月　山高み嵐もはけしたか秋にあらぬ物とや月の澄らん　一八三九

庭上月　秋の夜の月を見るやととふ人の跡たに見えぬ庭の白雪　一八四〇

九月十三夜　忘られぬ秋の半の空にまた重て月の名をやとくらん　一八四一

かそふれは今夜十とてみつの面に光照そふ長月の影　一八四二

さやかなる後のこよひの月見れは秋のも中の名たて成けり　一八四三

晴曇る今夜の空は長月の月の桂やむら紅葉する　一八四四

月前木　大空の色にかはらぬ緑とや松の木末に月のすむらん　一八四五

曉霧　嶋山もほのかに見えて霧の海に浮ふ小舟や有明の月　一八四六

曉の空も霧にやはからるゝ鳥の音をそき逢坂のせき　一八四七

秋雨　立こむる霧間に雨やそゝくらん淺茅か上に置る白露　一八四八

秋田　なるこ引田面に近きかりねには床より先に夢そ驚く」三ウ　一八四九

守人の薄き衣に秋の田のほむけの風も心してふけ　一八五〇

稲妻　わつかなる光の間にも草のはの露を求めて宿るいなつま　一八五一

穐霜　秋の霜の煙ほのめく朝もよひ木ゝの梢に光さすらし　一八五二

擣衣　何事もえにしなれはや吹風に遠きあたりの砧をそきく　一八五三

月前擣衣　橋姫や月にかた敷小莚の衣うつらん宇治の川なみ　一八五四

九月九日　あた物と何そはいひし白菊の露に千年をゆらく玉緒　一八五五

菊の露にのふる齢ひも長月のこゝの帰りの千世をかもへん　一八五六

重陽宴　暮る共いさしら菊の盃に空行星の影も見えつゝ　一八五七

汲からに千年の坂も越ぬへし山路の菊のけふのなかれに　一八五八
菊契多穐
末の代に淵と成へき水上や植しまかきの菊の白露　一八五九
水邊菊
おりゐつる鷺かとそ見る池水の汀にさけるしら菊の花　一八六〇
霜下菊花
今朝みれは移ふ色もなかりけり中〳〵霜に白菊の花」四オ　一八六一
紅葉
神代ならぬ草木はことに出ね共色にそ見ゆる秋のもみち葉　一八六二
山紅葉
光なき谷とし春は見しかとも紅葉そ照す深山へのさと　一八六三
紅葉増雨
立田姫のわさにも露のはへなしと時雨や猶も染る紅葉ゝ　一八六四
春されは野への緑のそふ雨に山の紅葉の色をますらん　一八六五
松間紅葉
露時雨いかにもとめて染ぬらん松の木の間にみゆる紅葉ゝ　一八六六
およはしなことのはゝそのもみち葉に夕日移ふ松のむら立　一八六七
毎人惜穐
なへて世の人の心におしむとも思ひしらすも暮る秋哉　一八六八
暮穐
風の前に殘る木の葉もある物を惜むに秋のなとかとまらぬ　一八六九
雨中九月盡
あすまたて今夜時雨る雨の音に秋も暮ぬと聞そ悲しき」四ウ　一八七〇

（以下三行分余白）

冬部

百首の哥讀ける中に

陰深き山もまはらに成にけり木の間を分て冬や来ぬらん　一八七一
初冬
松の葉のいつ共分ぬ梢にも時雨の音に冬は来にけり　一八七二
初冬時雨
おなし名の春てふ空の長閑さを時雨の雨のいかて分らむ　一八七三
時雨知時

時雨
さし殘る夕日なからの村時雨そめてや雲の色になるらん　一八七四

曉時雨
曉をうし共しらぬ獨ねに袖ぬらせとや時雨ふるらん　一八七五

落葉
散つもる紅葉を見ても化にのみたかて過にし秋をしそ思ふ　一八七六

落葉風
ちりつくす梢の穐をしたひてや庭の落葉に風の吹らん　一八七七

風早み山の木の葉のふりくれはこや紅の雪かとそ見る　一八七八

落葉埋橋
誰か今山を出しと誓ひけん木の葉に埋む谷のかけ橋　一八七九

落葉深
踏分て人はくれとも跡もなし跡より積る庭のもみち葉[一五オ]　一八八〇

夕落葉
山高み木の葉の時雨降まゝに色になり行夕嵐かな　一八八一

寒樹交松
紅に染し木の葉は散はてゝ時雨の音を殘す松かせ　一八八二

殘菊
霜かれの草葉の陰の白菊は秋なき時も咲かとそ見る　一八八三

庭殘菊
もとゆひに置霜ならし紫の色にそ殘る庭のしら菊　一八八四

寒草
いつくにか秋の行ゑを尋まし枯も殘らぬもすの草花　一八八五

月前寒草
露は霜に置かふ萩の古枝にももとの心に移る月かけ　一八八六

思ひ兼秋の行ゑをたつぬれは枯野の草に月そ寒けき　一八八七

冬日
冬の日の光は花の色なれは野への千種よ枯はかれなん　一八八八

冬月
時雨ふる音はすれ共空寒て木の葉に曇る冬の夜の月　一八八九

更わたる空にや霜の満ぬらん閨の隙もる月の寒けさ　一八九〇

夏にさへ霜にまかへる月影の光寒けき冬の夜の空　一八九一

寒山月
光なき谷もあらしな山の端に木葉曇らぬ冬の夜の月[一五ウ]　一八九二

網代群遊　見る人も日を暮しつゝ武士の八十うち川の瀬ゝのあしろ木　一八九三
朝霜　朝ほらけ出る光に色見えて移ふ物は霜のはつ花　一八九四
閑庭霜　冬枯の草葉に花そ咲にける朝の霜のおきてみつれは　一八九五
橋上霜　こほらてそ筧の水の音もせめ夕霜深き庭の松か枝　一八九六
冬朝　ものゝふの踏傳へたる古もかく夜や深き霜のかけはし　一八九七
冬夕山　冬の野につらぬきとむる玉なれや草の葉ことに氷る朝露　一八九八
冬嶺松　柴人の袖吹しをる山風や日影なからに寒暮すらん　一八九九
水鳥　嶺にたつ松の煙を冬されは焼炭かまと人や見るらん　一九〇〇
風吹は浮ねもかはる水鳥のをのか契や波にまかする　一九〇一
夜水鳥　夏山の陰や移ると水鳥の音羽に波の花もましりて　一九〇二
白波のよるの衾とみゆれはや玉もの床の鴛の諸聲　一九〇三
千鳥　手枕のすき間の風も寒きよにいかてか鴛の浪にふすらん」一六オ　一九〇四
小夜千鳥妻戀わひてみるめかる方やいつこと鳴て行覧　一九〇五
吹風と立白波とみつ塩と何れかからきちとり鳴なり　一九〇六
曉千鳥　清見潟関の戸さしも明方の鳥に聲そふ小夜千鳥哉　一九〇七
浦千鳥　風吹は蜑のかる藻のうら波になれも亂て鳴ちとりかな　一九〇八
古渡千鳥　ゆらのとを渡る衞のこゑす也行ゑもしらぬ妻や戀らん　一九〇九
神樂　夜もすからとる榊葉に鵲の橋にや霜の八度置らむ　一九一〇
五節舞姫　乙女子かかさしの玉のをみ衣むかししらるゝ舞の袖かな　一九一一

草庵聞霰　板やならぬ草の庵もさ夜更て音する迄にふる霰哉　一九一二
初雪　神無月時雨に曇る久方のおなし空より降るはつ雪　一九一三
海邊雪　見せはやなとふ人あらはすまの蜑の蜑の笘やの雪の曙　一九一四
網代雪　宇治川や氷とちつゝ網代木のいさよふ浪にかはる白雪　一九一五
積雪　冬かれの薄をしなみ降添ぬ幾へ積れる野への白雪」一六ウ　一九一六
竹雪　竹そよく音たに絶て木にもあらす草共見えす埋む白雪　一九一七
雪埋松　聲を聞人もあらしと雪の日は琴のをやうつ嶺の松風　一九一八
遠山雪　心あてに見れはこそあれ久方の雲ゐにまかふ雪の遠山　一九一九
暮山雪　山人のたつる夕けの煙のみ埋みははてすつもる白雪　一九二〇
雪後雨　降雪は月と花とのおなし色を心もしらて雨や打らん　一九二一
鷹狩　なら柴の馴こそまされ泊山幾日に成ぬ家路忘れて　一九二二
炭竈煙　炭かまのあたりのみして山賤の朝な夕なの煙すくなき　一九二三
　　深山木をやく炭かまの夕煙色や緑に立帰るらむ　一九二四
嶺炭竈　炭かまの煙や風になひく覧明ほのならぬ嶺の横雲　一九二五
椎柴　深緑色やはかはる椎柴のしゐて時雨る冬の空にも　一九二六
年内早梅　降雪の花にも更にをくれしと春より先に梅や咲らん　一九二七
歳暮梅　あたら敷春をや見んと咲梅の花の下紐とけ渡るらん」一七オ　一九二八
歳暮　なかしてふその春の日も秋の夜も名のみ成ける年の暮哉　一九二九
　　けふのみと春をおしみし花の陰たつことやすき年の暮哉　一九三〇

歳暮忌　一九三一
ことわさに何をなしつと人とはゝいかゝこたへん年の暮哉
流れ行年のゐせきや世の人の心に波の立さはく覧　一九三二
（以下八行分余白）　」セウ

戀　部

初　戀　一九三三
思ひそむる心の塵をふもとにて行末しらぬ戀の山哉
まかなくに生出初し戀草は見し面かけや種と成らん
忍　戀　一九三四
みたるとも人には見えしいつとても心のをくの忍ふもちすり
寄忍草戀　一九三五
草も木も色かはり行秋にたに人を忍ふは枯すも有哉
忍涙戀　一九三六
雨とふる涙はさへし大空をおほふ計の袖はありとも
百首の歌讀ける中に戀の心を　一九三七
色になる袖の涙も影移る月の桂の紅葉とや見む
寄莚戀　一九三八
塵をたにすへしとはらふ小莚に涙そつもる夜はの獨ね
定家卿四百年忌に　一九三九
寄煙戀　一九四〇
侘ぬれは煙絶にし塩かまのうらやまれぬる我おもひ哉
曉戀　一九四一
古のしちのはしかきかそへしも思ひしらるゝ曉の空」ハオ
寄木戀　一九四二
別れての涙なりせはつらからし獨ぬる夜の曉のそら
寄井戀　一九四三
つれなくてなひかぬも猶頼まゝし積れはつゐに雪折の松
一九四四
たてゝのみさなから塵に埋るゝこれやまことの夜の錦木
一九四五
契たゝむすふともなきいさらゐのいさゝは人を忘たにせん

寄草戀　いつの世に種をまきてか茂るらんあかぬなけきの杜の下草　一九四六
被返書戀　藻塩草かきやる跡も其まゝに帰るそつらき波の浦風　一九四七
祈戀　神もさのみ耳なれぬらし祢宜言をやめて祈りのしるしをやみん　一九四八
祈身戀　難面におもひよはりてせめてさは忘れ果ねと身をいのる哉　一九四九
寄初草戀　あはてのみ我戀しなはいかゝせん千世もと身をや先祈らまし　一九五〇
厭戀　初草のはつかに人を見てしより尾花か本の茂る比かな　一九五一
寄風待戀　さりとても人はいとはしいとはるゝ我身の浮におもひしられて　一九五二
尋戀　秋きぬとおとろくのみかこぬ人を待夕暮の荻のうは風[一八六]　一九五三
初逢戀　いかにせん教へし宿の梢さへかれぬる人を尋わひつゝ　一九五四
稀逢戀　山鳥のはつおの鏡いまよりは影をはなれぬ契共哉　一九五五
別戀　わたつ海にひらくためしかとけ初る人の心の花の下紐　一九五六
互惜別戀　今はとて別るゝ袖の玉かつら俤をのみ跡に殘して　一九五七
後朝切戀　きぬ〳〵のかたみに殘る移りかは心にしみて悲しかるらん　一九五八
悔戀　明ぬれは海士の小舟の漁火のきえて物思ふけさのかへるさ　一九五九
寄風戀　よそにたつ難波のうらの夕けふりくゆる思ひそやる方もなき　一九六〇
寄橋戀　面かけを夢にたに見す飛鳥風衣のすそは吹かへせとも　一九六一
寄海戀　かけてのみ幾年月を戀渡る心のすゑや勢田の長橋　一九六二
寄石戀　ふし沈み物思ふ床はわたつみと荒にし波のよるそ悲しき　一九六三
　　年ふれは軒の雫に石たにも跡ある物と人はしらすや　一九六四

冬夜戀　夜もすがら寒る衾のひとりねに恨やまれぬる鴛の諸聲」一九オ　一九六五
寄礒戀　夢の中に見し俤は跡もなし礒の音そねやに殘れる　一九六六
寄鳥戀　音にたてぬうらみはいかて白鳥のとはてや人の月日へぬらん　一九六七
舊戀　入しより幾世になりぬをのゝえもくたす計の戀の山路に　一九六八
絶互悔戀　おもほえす世のいひなしに絶果てかたみにくゆる中そはかなき　一九六九
寄遊女戀　浮ねするあまの子にしも馴ぬれはかゝる物かは袖のしら波　一九七〇

（以下七行分余白）」一九ウ

雜部

百首の歌の中に

里梅　しられすよ昔の香にや匂ふらん梅咲にけり小初瀬の里　一九七一

おなし哥の中に

檐梅　山里の軒端にしろく咲ぬれと何の花そと問人もなし　一九七二
春雨　春雨は降すさひてもさひしさの猶殘ぬる軒の玉水　一九七三
窓雨晴　窓ちかき軒の雫の音せぬは春のなかめの晴やしぬらん　一九七四
山家待花　岩に生るまつこともなき柴の戸に花に日数をかそふ計そ　一九七五
閑庭花　しめ置てしつけき宿と住人は花や心のさはり成らん　一九七六

心ちわつらはしくて花見にまかりかたく侍りけれは

櫻咲春の山邊に行通ふ心よおなし身をなへたてそ　一九七七

年比吉野の花を望み侍れといまたえまからて」二〇オ

寄花無常　杜丹（マヽ）

幾春の花を過しつ吉野山唐土よりも遙けからしを　一九七八

散花を見れはさなから雪の山鳴鳥の音をきかぬ計そ　一九七九

山家水鷄

いかにせん思へは罪のふかみ草餘り色かにそめる心を　一九八〇

過し世をなれもくゐなの問来てや柴の扉をたゝく成らん　一九八一

夏夜

五十年ふる枕の夢をかそふれは中〳〵なかき夏の夜の空　一九八二

庭夏草

庭の面はさもあらはあれ心にしなき物草の茂らすも哉　一九八三

夏の歌の中に

夏虫

草村のもえ出初し蜻蛉のをのかまゝにも茂る比哉　一九八四

窓前螢

世中は何か歎かん夏むしの身をこかす間の短夜の空　一九八五

樹上蟬

六十迄きえぬ思ひもしられけり窓打雨にもゆる螢は　一九八六

扇

夢となりし春の小蟬も空蟬のうつゝも同し梢とそ見る　一九八七

夏の日は身をしはなたぬ扇哉戀しき人の形みならねと　一九八八

七夕

七夕にけふはかさまし何かひとつ我物としも思ふ世ならは　一九八九

玉祭

なき玉を祭るこよひの思ひにはたかぬ煙に見ゆる俤　一九九〇

隣にもぬかつく聲そ聞ゆなるなきを思ひの玉祭る夜は　一九九一

世になきも今夜くるてふ玉笥身は親なしと哀れ思はし　一九九二

朝顔

さしもわか心に似たるかる萱の風にみたれぬつかの間もなし　一九九三

幽栖荻風

朝顔の花にそ知ぬ人の世をいかにかへしと思はさるへき　一九九四

世のうさに隱れてすめる我宿を風にしられぬ荻の葉も哉　一九九五

野　虫　人ことのさか野の原に鳴むしはなれも浮世を秋はてぬとや　一九九六
擣衣驚夢　見し夢はきぬたの音に驚けと長き眠の覚る共なし　一九九七
田家水　秋の田のかり初なから住庵に結ひ馴たるいさらゐの水　一九九八
田家鳥　秋果る山田の庵の淋しきに中〳〵鳩の聲そ友なる　一九九九
山家冬朝　よそにまた柴折くふる陰もなし朝けの霜の煙ならては[三ォ]　二〇〇〇
枯野　浮身ゆへ枯野の露も哀なりをき所なき類ひと思へは　二〇〇一
衾　夜の霜のふるき衾は重ても猶寒渡る閨の中かな　二〇〇二
霰驚夢　驚かす音もあられの手枕に浮世の夢やともに覚らん　二〇〇三
初雪　めつらしと猶思はまし初雪の我黒髪にましらさりせは　二〇〇四
閑中雪　吹風も筧の水の音もなく雪のふる日を心とも哉　二〇〇五
山家雪　友とせし竹さへ雪に埋れてうたゝ淋しき冬の山里　二〇〇六
歳暮雪　あちきなく我身につもる年の暮をいさ白雪の花にめてつゝ　二〇〇七
歳暮梅　年暮て匂へる梅の身なりせは老の後にも花はさかまし　二〇〇八
おなし歌の中に
嶺雲　うしろやすき年の暮哉世間のうきもつらきも身には殘らて　二〇〇九
山路夕　浮なからすめは住ぬる世中をいつまてよそに嶺の白雲　二〇一〇
晩鐘　山高みのほりし嶺は入相の鐘より後の暮そ久しき[三ウ]　二〇一一
一日〳〵命をおふる入あひのかねて驚く人そまれなる　二〇一二
入あひの鐘を聞こそ嬉しけれきのふはけふをしらぬ我身に　二〇一三

遠鐘幽　かすかなる野寺の鐘のひゝきにも幾里人の夢や覚らん　二〇一四

隱士出山　かしこきも山を出るや君か代の道すなをなるしるし成らん　二〇一五

閑居　しつかなる宿とていたく長ゐせし心のとまる事もこそあれ　二〇一六

苔為石衣　奥山の岩ほも何のうけれはや苔の衣のかはく間もなき　二〇一七

杣山　杣人の斧にもれたる深山木も哀れいつまてありは果へき　二〇一八

瀧水　耳をこそ洗ふためしもかたからめ瀧つ心の濁らすも哉　二〇一九

澗水　谷の水流もたゆな年をへて結ひなれたる柴の庵に　二〇二〇

礒巖　塩こさぬ礒邊の岩ほいつの世の波にゆられし真砂成らん　二〇二一

嶺上松　琴の音に通ふときけはをのつから心ひかるゝ嶺の松風　二〇二二

渚松　青海の外に緑の色そへて渚に見ゆる松の一むら[三ォ]　二〇二三

松久友　尋すも月雪の夜の友なれや馴て年ふる庭の松か枝　二〇二四

薄暮松　遠近の野寺の鐘の聲〳〵をひとつに送る松の夕風　二〇二五

禁中竹　夕風にみかきの竹の露散て玉を重ぬる庭そ涼しき　二〇二六

窓竹　いかにせんいさゝむら竹茂りあひて学ひの窓のくらき心を　二〇二七

雨中緑竹　降雨に軒のくれ竹打なひき晴れはくらき窓の内哉　二〇二八

竹風如雨　降雨の惠みはしるし若竹の千尋の陰も深き緑も　二〇二九

庭篠　草木にもあらてすくなる呉竹の葉風よ雨に何まかふらん　二〇三〇

深山雨　日影さゝぬ庭の玉篠玉ゆらの露も常盤の物とこそみれ　二〇三一

　　すかの根の長き眠も覚ぬへし深山の奥の雨の音には　二〇三二

夜雨

小夜更てしはししつけき心たにくたくる雨の音そわりなき　二〇三三

遠村煙

一むらの里の煙もよそよりは賑ふからに物そさひしき　二〇三四

述懐

四十年まてなとかは花のさかさらん言の葉さへに年きりやする」三ウ　二〇三五

洲にたてる田鶴ならなくに何とてかよせて帰らぬ老の浪そも　二〇三六

懐旧

帰りくる昔なれはや浮事の思ひ出つゝ身にはそふらん　二〇三七

古郷

陰高く見ゆる梢や古郷の軒端に植し小松成らん　二〇三八

玄琢法印の山荘白雲溪と云所にて

ことしけき都をよそにしら雲の谷の心やしつか成らん　二〇三九

以三法師六字堂に尋来て讀る

山里にすむ心ちする宿とてや世の浮めさへ嵐吹也　二〇四〇

かへし

山里にあらぬ住家もとふ人の心や清きあらし吹らん　二〇四一

いもうとの方より紅梅のくゝり枕をおこし

侍りしにわつらふ時なれは

たれこめて住ぬる宿も今よりは松の扉をあけの手枕」三オ　二〇四二

壬生のたゝみねの硯を見侍りて

天つ空に聞えあけつゝ末の代も殘る硯の水くきの跡　二〇四三

（以下十行分余白）　」三ウ

誹諧

春駒　春の野に立出て見れは草わかみ心の駒もいさむ比かな　二〇四四

岩藏の花さかりにまかりて門たゝけと

入さりけれは讀てつかはしける

岩藏やその関の戸もあけ給へかく有かたき花のさかりを　二〇四五

娘のわらはやみしける時芥子の花に付て遣しける

白露のふるふやまひをけしの花見ては千世も万世をもへん　二〇四六

雨後夏月　一通り降夕立の雲間より笠宿りして月や出らむ　二〇四七

早朝に旅たちて讀る

都をはひかししらみに出ぬれは身の毛もよたつ心ちこそすれ　二〇四八

（以下二行分余白）　└三四オ

旅

寄花旅　あまたゝひ草の枕はかへぬれとはらふはおなし花のしら雪　二〇四九

旅　草枕旅にしあれは身におはぬ花の錦をしとねにそしく　二〇五〇

驛路霧　朝霧にたれまよふらん明石潟馬や路ちかく鈴そ聞ゆる　二〇五一

羇中衣　我袖よしほれな果そ嬉しさを都に行て何につゝまん　二〇五二

野宿　旅衣うらひれぬれは暮す共いさ宿からん小萩咲野に　二〇五三

關路鷄　衣〳〵をよそにいとふもいさしらて鳥の音急く関の旅人　二〇五四

旅宿夢　帰るさをなとはる〳〵と松浦舟夢に見しかは近き都を　二〇五五

關路夕

人傳に聞し遠坂越てこそ身に白川の関の夕暮　二〇五六
よひ〳〵に打もねぬより旅衣日も夕暮の関守そうき　二〇五七

（以下二行分余白）　一三四ウ

哀傷

東泰院門跡御遷化に讀る

光猶世には殘れとめの前に消しは悲し法の燈　二〇五八

慈父

いかにせましすみの山より高きてふ親のめくみは忘られね共　二〇五九

悲母

うせし日をかそふ計そたらちめのちふさのむくひいかて我せん　二〇六〇

正保三年五月五日母の喪にゐて

昔思ふ袖の涙もけふといへは五月の玉によそへてや見む　二〇六一
いかなれは有し世にしも引かへてけふはあやめのねになかれぬる　二〇六二

予つねに煩はしくて孝行をもなさゝりける

事をかなしみて　一三五オ

帰りこす流るゝ水の先たちし親につかへて千度悔しき　二〇六三

母の百ケ日にあたりけれは

別れてはあらしと思ふ日数さへ十つゝ十をかさねつる哉　二〇六四

おなし七年忌をとふらひて
なき人に別れし年も七車めくるや早き月日成らん　二〇六五

哀傷の哥の中に
なき人の玉のありかを尋ぬれはしほるゝ袖に露そ置ける　二〇六六

したしき人のみまかりけれは
涙のみしらてすゝろにこほるらん世は卯の花の散をならひと　二〇六七

（以下三行分余白）　└三五ウ

佛別

釋教

おなし世に有とはきけと鷲の山入は悲しきけふの月影　二〇六八

釈教の哥の中に
雲晴て行とも見えぬ月影も終には西の山に入へき　二〇六九

方便品若有聞法者無一不成佛
空をさして教へし月を見る人の獨も誰か闇にまよはん　二〇七〇

妙音品及衆難處皆能救済
生死の海に沈める世の人を渡すや法の御船なるらむ　二〇七一

ある禪師の許へ讀て遣はしける
我法は弥陁を頼みて名をとなふさとりの道や何れ成らん　二〇七二

（以下二行分余白）　└三六オ

神祇

社頭水　み草ゐぬよるへの水やあれ渡る神のやしろの鏡なるらん　二〇七三

社頭榊　君か代もときはかきはに万世をみむろの山の神の榊葉　二〇七四

寄神祝　たのもしな末の代までも動なき岩戸を出し神のめくみは　二〇七五

賀

祝言　萬代とこやよはふなる龜の尾の山の岩根の瀧つ瀬の聲　二〇七六

月前祝　山鳥のをろかなる身の見るめにも曇らぬ御代は鏡とそ思ふ　二〇七七

神代より傳へし道そ敷嶋の末猶照せ秋の夜の月　二〇七八

續松葉集第三終　六字堂　宗惠　[六ウ]